

研究ノート

道徳教材としての殉職についての一考察

—小野さつき訓導遺徳顕彰館にふれながら—

佐藤 久恵¹⁾

Discussion of the Notion of Duty as Teaching Material for Moral Education Classes:
Use of Pedagogical Information From *Satsuki Ono Kundo Memorial Hall*

Hisae Sato

目次

- 1 はじめに
- 2 殉職について
 - 2.1 小野さつき訓導の略歴
 - 2.2 殉職に関する断片的な記録について
- 3 殉職の影響
 - 3.1 宮小学校と地域への影響
 - 3.2 女子師範教育への影響
 - 3.3 東京市視学長による映画制作の提案
- 4 発見された映画の内容
- 5 考察—道徳における殉職の扱いについて

要約

宮城県刈田郡宮尋常高等小学校（現宮城県蔵王町立宮小学校）小野さつき訓導は、1922年川におぼれる教え子を救助しようとして自らの命を落とした。殉職した一訓導の姿は顕彰され、昭和初年には映画も作られた。今日でも、殉職の事実は語り継がれ、1991年に同校で副読本も作られた。しかし今日の道徳教育で、命の教育を扱う際には、生命の尊さは教えても、自分の命と引き替えに他者の命を助けることに価値を見いだすことはしない。子どもを助けるために殉職した教師の姿は「生と死において矛盾をはらむと思われる事実」なのである。そのため、副読本は、殉職という事実を命の教育という視点ではなく語り継ぐべき郷土の偉人という価値観でまとめている。筆者は、昭和初年の映画と今日の副読本の扱い方のそれぞれの背後にある教育的な意味を探る。

キーワード：修身、道徳、殉職、遺徳、大正自由教育

1) 佐藤 久恵 東京未来大学こども心理学部(非常勤講師)

1 はじめに

小野さつき訓導が蔵王町立宮（みや）小学校で道徳の教材として副読本に取り上げられていることは、予想はしていたものの衝撃だった。小野は、1922（大正11）年に、勤務校で担任をする児童が川で溺れているのを助けようとして、殉死した訓導である。小野さつき訓導遺徳顕彰館（以下、遺徳顕彰館）には、肖像、身につけていた袴、新聞記事、弔辞、音楽資料などが飾られている。幾重にも引き裂かれた袴は「命がけで、生徒を助けた姿」を想起させる。

現在、道徳教育では、命の教育を扱うが、生命の尊さは教えるものの、自分の命と引き替えに他者の命を助けることは積極的に扱えない。道徳の教材として副読本で訓導の殉職を扱った場合には、児童の側でも、生命の尊重と相互に矛盾したことに気付いた意見も授業の中では容易に出てくるのだろう。「モラルジレンマ」として扱うことも可能であろうが、その副読本の場合は、どのような意図で小野訓導の殉職が取り上げられたのだろうか。

筆者は群馬県に育ったが、小野訓導の殉職は身近なエピソードだった。幼い頃に、両親がその故郷を語る話の中で「小野訓導」という呼称や「小野訓導精神」という言葉を何度も聞いていたからである。しかし、私は大学院に入るまで「訓導」という語の意味を正確に知らず、特別の響きのあるものとして捉えていたもののそれ以上は考えることがなかった。そのため「訓導」が「小学校正教員」の意で「教諭」を指す言葉だと知ったときは、少々拍子抜けしたものである。

これまでいろいろな形で、私は「小野さつき」という存在に遭遇することがあった。一つには「さつき」が祖父の従姉であったということもある。また、どうやら彼女についての映画があるようだということを知ったこともその一つだった。しかも、それは宮城県外でも上映されていたらしく、筆者の自宅（群馬県高崎市）そばの老婦人も、「小野訓導の映画を見た」ということを知ったときには、いったい誰の

発案でどのような経緯で映画が作られ、そしてどのような仕組みで流布したのかと、たいへん不思議に思った。映画制作の目的が「追悼」であるにしても、それ以上の何らかの意図がなければ、映画制作になど至るものではないと考えたからである。

そのほかに群馬大学教育学部附属図書館の書庫で、手に取り、見たはずの書籍『殉職訓導小野さつき女史』⁽¹⁾が、その後、図書館のカウンターで再度調べてもらっても所在がわからず、そのまま消えてしまったということもあった。さらに14、5年くらい前に遺徳顕彰館のある蔵王町立宮小学校を訪ねる機会があったが、その日が休日であったこともあり、遺徳顕彰館に入館することはできなかった。

幼い頃から何度も小野訓導の話聞きながら、いつも素朴な問が残った。一つは「なぜ小野さつきは子供たちを川原に連れて行ったのか」という問であり、もう一つは、なぜ、その死後「映画」がつくられたのか、という問だった。そのように「小野訓導の殉職」ということを身近に感じていた私には、殉職事例を含む話題が道徳教材となっている、ということに少なからぬ驚きを覚えたのである。

本稿では、小野さつき訓導殉職の道徳教材化がどのようなことなのか、ということを探る。「殉職を顕彰すること」から「道徳教材化」にはかなりの距離がある。筆者はその距離を十分に埋め切れていない。しかし、命の尊厳、尊重を扱う道徳にとって、殉職はきわめて重要な問題である。筆者は、本稿にいくつかの埋められない飛躍を残しながら、研究ノートとして殉職の道徳教材化の過程を辿ることにしたい。

2 殉職について

2.1 小野さつき訓導の略歴

小野さつき訓導については、いくつかの資料がまとめられているので、本稿では、それらを合わせて略歴を以下のようにまとめておきたい。

1901（明治34）年 宮城県刈田郡福岡村（現・白石市）に生まれる。

1913（大正2）年 宮城県刈田郡福岡村立福岡小学校卒業。

1918（大正7）年 白石実科高等女学校（現・宮城県白石高等学校）卒業。

1918（大正7）年 宮城県女子師範学校（現・宮城教育大学）へ進学。（在学中は3度、級長に選出）

1922（大正11）年3月 同師範学校を卒業。

同年4月4日宮城県刈田郡宮尋常高等小学校（現・蔵王町立宮小学校）へ訓導として、赴任。（尋常科4年の担任）

1922年（大正11年）7月7日 白石川河畔で野外での写生を指導中、川の深みに嵌って溺れた生徒3名を助けようと自ら川に飛び込み、児童3名のうち2名は救出したが、残り1名の救出に向かい自らもその1名と共に溺死した。享年21。学校に赴任してわずか71日目のこと。

この「小野訓導」という人物が具体的にどのような人柄であったかということは、今のところ、文献による以外、知ることができない。宮小学校の遺徳顕彰館に飾られた、当時の普段着の質素な着物や、自ら縫ったという裁縫の運針の様子からは実直で丁寧で辛抱強いまじめな人柄を想像させる。170cmの身長という資料もあり、当時としては大柄であったこともわかる。筆者の祖父が唯一語っていたところでは、「自転車に乗って通学していた」ということもあるが、それが女学校あるいは師範学校生徒のときのことなのか、宮小学校へ勤務してからの通勤時のことなのかは、残念ながらはっきりしない。宮小学校に勤務するときには下宿していたということだから、この時の使用も考えにくい。後述する映画(DVD)視聴の時にも、自転車に乗ったシーンは見ることがなかった。

2.2 殉職に関する断片的な記録について

殉職当日の実践記録が、当時編纂された『殉職訓導小野さつき女史』（宮城県教育委員会・刈田郡教育会編）等に収められており、国立国会図書館のデ

ジタルアーカイブで見ることができる。その内容について、宮小学校の道徳顕彰館で展示されている資料に基づいて記述しておくことにしたい。両者には違いがあるためである。この指摘は、佐藤武の著作の中にも記述されている⁽²⁾。

七月七日（金）[曜日の前に校長「佐藤」の確認印が押されている。]

第一時 読み方

一、十六 航海ノ話

二、自五十三頁三行

至五十四頁七行（内容が書かれているが判読不明）

四、

五、

第二時 算術

一、十九頁 問十

二、商二〇 付 除法ニ

□□カケタル□□□ザルモ可ナルコト□□□

五、

第三時 体操

一、練習

五、

第四時 図画

一、野外写生

二、

四、1、場所を選択

2、写生

3、暗示

4、整理

五、

第五時 手工

一、粘土細工

二、自由制作

筆者の素朴な第1の疑問の「なぜ川原につれていったのか」は、以上の資料から「野外写生」の時

間であったためということがわかる。筆者は、以前から「写生の時間」だったのだということを聞いていたが、校外へ写生に出かけるということが、当時、あったのかどうか、いつも不思議に思っていた。

その疑問は、林曼麗の論文⁽³⁾等から、大正自由教育で校外写生が行われていることがあきらかとなり、それらの知識を得て解消された。小野訓導の実践もまたその大正自由教育の中にあつたという理解である。それまでの臨画から自由画（創作画または、写実画）へと授業内容が変わっていく展開は、東北の地、宮城県女子師範学校（現：宮城教育大学）の教授法の中にも及んでいたわけである。それを傍証するものとして、遺徳顕彰館に展示されている小野の遺品の一つ成城小学校編『児童中心主義の教育』がある⁽⁴⁾。おそらく、師範学校時代、または宮小学校赴任後に大正自由教育に接する機会が多かったのであろう。師範学校時代には、読書をしている姿が見受けられたというが、小学校への着任後には、ほとんどその姿を見ることがなかったという記述もあり、初任の時期の忙しさを示していると同時に、「師範学校時代の読書」が実践に反映していると考えられる。

しかし、小野訓導はなぜ、この日に写生をすることにしたのだろうか。当日の授業案では、「校外写生」であるために6校時の手工と5校時を交替したという記録がある。当日の天気は、道徳顕彰館の展示の教授日誌に「晴れて蒸し暑かった⁽⁵⁾」とあり、それらの資料からその数日前から降った雨で、水量は増していたが、川原に児童を引率して出かけたとある。また、道中の安全を考えて川原へのルートも変更していたとされている。

いくつかの書物に見られるのは、彼女の思いの一つに、その前日にあつた皇太子殿下（後の昭和天皇）の奉迎があり、そこに訓導も児童も一緒に奉迎していたため、その臨場感を振り返ろうとしていたとも考えられる。彼女が殉職した当日に履いていた袴が、通常の質素なものではなく、前日の奉迎の折につけた袴だったということもその理由として上げられて

いる。しかし、その日の絵は現存が確認できていない。子供たちは何をその日に描いたのだろうか。

筆者は、2016年8月29日と11月4日に実際にこの地を訪れた。最初に訪れた日は、折から、二つの高気圧に挟まれて、珍しい経路を辿った台風10号の影響でその日は大雨だった。JR東白石駅から約15分の道のりを歩いて、宮小学校へ向かいながらみつめた白石川は、橋脚を少しだけ残して見せるほどの水量で、満々と水をたたえていた。小野訓導が亡くなった時はそれほどの増水ではなかったものと思われるが、56人の児童を連れ、意識の届かない部分がどうしても生じたということかもしれない。

3 殉職の影響

3.1 宮小学校と地域への影響

小野訓導の殉職は、それから現在まで途切れることなく宮小学校で語り継がれることになった。毎年7月7日に「小野さつき訓導追悼式」が行われ、現在に続いている。

そして、小野訓導の事跡を顕彰するために、宮小学校には道徳顕彰館が1988年に建設され、おもに小野訓導の殉職に関する資料展示がなされ、遺品や当時の新聞記事、音源資料、掲載誌等を展示している。

2016年4月15日の河北新報の読者欄には、昭和15年4月にこの宮小学校に赴任して子供たちを教えたという93才の元訓導の投書が載せられている⁽⁶⁾。その投書に寄れば、各教室の後ろに「小野さつき訓導の写真が飾られていた」ということが書かれていた。95年間「継続」している追悼の行事については、以下のようなことを宮小S教諭から聞くことができた。

「ある時期までは7月7日に決まって大追悼会を行っていた。和尚さんに、お経を上げてもらい、町長も列席して、学校の校長先生、教頭先生、教務主任といった職員は礼服（黒服）を用いて、その行事を行ってきたのだということです。また、ある時期からは5年ごとに大きな追悼式を行うようになり、4

年生に対しては実践をつづけるという形式に変わっていったようです。「4年生に対して」というのは、小野訓導が担任していた学年に該当するからです。(宮小学校・S先生談)

1991年3月には同校で編集した副読本『ふるさとをみつめて わが宮』が発行されている。同書は、1990年度、1991年度の2年間にわたって文部省の道徳教育(学校と地域の連携推進)の指定を受けた成果である。同書は全71頁で、低学年向け、中学年向け、高学年向けの3部構成で、表記や文字の大きさが異なっている。それぞれの部分に小野訓導を追悼する内容が収録されている。

目次は次のとおりである。〔 〕内は筆者が補った

〔低学年向け〕

「おの小野くんどう」ついでうしき ……7

はくちょうに えさを ……12

いちごつみ ……16

きもち いいなあ ……21

〔中学年向け〕

「小野くんどう」の碑 ……26

はぐれ鳥 ……31

むじんばいてん無人売店 ……35

つづみ えいざ えもん堤 栄左衛門 村長 ……39

でんとうかぐら伝統神楽 ……44

〔高学年向け〕

先生を死なせて……すまねえ ……50

伯超神社 ……55

ぶっぷちゃん医者 ……60

モモから生まれたイチゴ ……66

また、冒頭の2-3頁に序文として、蔵王町長北岡仙吉氏(当時)の「心豊かに明るく育つ子どもたち」、及び校長大宮貞昭氏(当時)の「ふるさとをみつめて」がある。

3.2 女子師範教育への影響

小野訓導の殉職は、女子師範教育で水泳指導を強化するという影響を残した。群馬県女子師範に昭和6年から2年間在籍し、卒業した両角千鶴子氏への

インタビューの中に、以下のような部分がある。「でもね、女子師範はプールもあったの。男子師範はプールなかったっていうけど。何かね、小野訓導って言ってほら、昔の話が伝わってるけど、子どもを水泳で助けて、自分は死んじゃったってあるでしょ。[両角補記 校外学習で川に落ちた子供を助けて女の先生が死んだ事件があった] そのこともあるから、女の先生でも、水泳をしっかりと出来なきゃいけないっていうんでね。プールがあったの。[両角補記 七月の学期末の放課後はプールの時間が多くプールが賑やかだったし、九月には水泳大会がありました。]

小野さつきが宮城県の女子師範を卒業し、赴任先の宮尋常高等小学校の1年目で不慮の事故にあったのは、大正11(1922)年のことである。両角氏が、前述の話を聞いたのは、10年以上後のことであったと考えられる。群馬県女子師範の沿革を見ても、「プールが建設された時期」は未詳だが、群馬県女子師範学校の『庶務綴 大正15年1月』には「大正15年6月25日竣工予定」という記載のある「校地使用ノ件御願」の文書がある。また『舎務日誌』には大正15年7月10日「プール開キノ盛大ナル式を挙げ」と記述されている。昭和6(1931)年に撮影された女子師範のプールサイドでの写真は『群馬大学教育学部100年史』にみることもできる。

また、大正11(1922)年には女教員大会⁽⁷⁾が東京で開かれ、この小野訓導の話が演題の一つとなった、ともある。小野の殉職は、女教員の中で共有された話題であるとともに、女子師範教育に必要なプログラムであると認識されたのではないだろうか。

3.3 東京市視学長による映画制作の提案

小野訓導の殉職は、教育映画も生み出すことになった。制作経緯は以下のとおりである。映画によって小野訓導の殉職は全国一般に知られることとなった。

大正11(1922)年東京市学務課長視学長に任命されたばかりの佐々木吉三郎氏が、9日午後11時に実地調査のため仙台へ赴くのだが、次のように述べ

たという。

「小野さつき女史の行動につき私は全く感心してしまつた。教育家が児童を愛する精神、その実例は幾ら有つても足りない位です。現場をも弔ひ又村葬と校葬にある葬儀などをすべて活動写真に取り、都合によれば、その映画を全国に持ち廻つて、犠牲的精神の鼓吹の一助にもしたいと考へてゐる。⁽⁸⁾」

映画（活動写真）が作られる背景には、この佐々木視学長の言葉が反映された可能性があるのではないかとと思われる。

この映画ばかりでなく、演劇、琵琶演奏、浪花節のようなものも含め、日本各地で開催されていく。筆者は当初、東京視学長の佐々木吉三郎の出身が宮城県であったこと、また、小野さつきの本家筋の従兄・小野峯三郎が宮小学校校長を3年間（1894～1897）務めたことが大きな原動力となつて追悼が継続された可能性があるのではないかと考えた。

しかし、地域に限られた限定的規模ではなく、この映画は全国的規模で展開された。例えば次のような記録もある。「乗杉文部省社会課長の紹介にかかる活動写真協会とはかり女史の真相を傳ふる映画を作成した七月十九日福島公会堂に於て開催せられたるを始めとして二十五日より仙臺に於て催され尚追々各地に於て催される計画である⁽⁹⁾」とあり、その後は、京都での開催、本郷での演劇、音楽会、懸賞付きの唱歌募集、などが行われた。映画も数種つくられたというが、以前には、宮城県白石市図書館で映像資料の所蔵があった。現在、国立国会図書館の所蔵を調べると、「録音資料・館内限定視聴」という表示で以下がある。これは、録音資料で、琵琶演奏に小野訓導の殉職の話が演じられている。

噫・小野訓導（一）館内限定閲覧

噫・小野訓導（二）館内限定閲覧

噫・小野訓導（三）館内限定閲覧

噫・小野訓導（四）館内限定閲覧

萩谷姫水ビクター 1934 国立国会図書館デジタルコレクション。

最近では「初音ミク」が「小野訓導の物語」を演

奏してもいる。

2016年、小野訓導を描いた映画の原盤の一部と見られるものが発見され、河北新報（2016年3月31日）で報じられた。記事は同社のウェブサイトにも掲げられている。同記事はネット上⁽¹⁰⁾でも検索することができた⁽¹¹⁾。

記事によれば、北海道で発見された。映画のタイトルは「人生乃花 殉職訓導 噫々（ああ）小野女教員」で、発見されたのは全3巻のうち第2巻のフィルムである。35ミリ白黒の無声映画で、時間は1巻あたり10分程度だという。また、松竹や日活が映画化し、1922年に各地で上映された記録があるが、それとは別に制作したものだという。

筆者が、8月29日に、宮小学校の遺徳顕彰館を訪問した時、案内を担当して下さった宮小学校のS教諭から、発見されたのは映画の3分の2だということをお聞きした。市販の予定はないが、将来的には館内でDVDを上映する可能性もあるのではないかとのことだった。

今年(2016年)の7月7日の小野訓導95年忌の追悼大会で上映して紹介した後だったので、DVDの視聴は許可していただけた。説明に拠れば、3分の1は映画の撮影シーンのようなもので、3分の1は当時の葬儀をそのまま撮影したものということだった。

4. 映画の内容

映画原盤（ダビングしたDVD）のを職員室そばの教室内で筆者は視聴させて頂いた。視聴したものは『小野訓導 発見されたフィルムのDVD（一般用）』である。内容の概要は以下の通りである。第1巻及び第2巻の途中までは再現シーンであり、第2巻の葬儀の部分は実際の映像である。

（最初のシーン）

「自宅に、事故を知らせに来る人が来る。驚いて父親と思われる人が家から飛び出して来るが、リュウマチを患っているために、思うように歩けず、馬に乗り現場へと向かおうとする。」

「白石川でおぼれているところを助けようとしている

場面」

(やや違和感があるのは、小野訓導の役が男性俳優によって演じられていたことである。)

第一巻

(以下の○印は、ナレーションのないこの無声映画において、フィルム内に時々入れ込まれた文字テーマであり、視聴しながら筆者がメモをした。)

○朝ぼらけ

○よろこび (辞令を親たちに見せて喜んでいるシーン、学校のシーン (子供たちを並ばせていたり、子供たちが遊んでいたり、集合したりしているシーン)

○先生の情は斯くの如く

赤子を抱いて家まで行ってあげる

投網のおじさん

○七月七日

○白石川付近 (写生)

○三名は無断で水泳した

○二児をようやく助けた

○学校へ

(子供たちが連絡)

○成沢を助けるため渦水へ入る

○おじさん 先生が……

(火の見櫓の鐘を鳴らしているシーン・人々が川原へ入って行く)

第二巻

○前兆 (自宅の縁側でうとうととしているさつきの家の家人に夢の中でさつきが一生懸命に語りかけているシーン)

○知らせ

○現場へ急ぐ

○おお娘 よく死んでくれた

(川原で 児童の成沢くんと並べられて蘇生をはかられている)

○我が子の死がいにも目もくれず

(成沢くんの父親は、我が子の死骸に目もくれず、小野さつきの死骸にすがりつく)

○検案

(検死をしに2人くらいの男性がやってくる)

○言葉はなく

(葬儀のシーンは本物の映像ということ)

音楽隊、花輪、たくさんの人たち、日蓮宗の装束、遺体または、遺骨を運ぶお宮は、御神輿のような形状。これを葬儀場所から墓地まで運ぶ。実際の葬儀は、村葬と学校葬があったと記述されているが、映画の中ではどちらの映像かは判別できない。

この「葬儀の場面」については実際に当時行われた葬儀を記録したものであることから、当時の視学長が述べたことに影響を受けて、撮影されたことが考えられる。しかし現時点では因果関係は確認されていない。

5 考察—道徳における殉職の扱いについて

本稿の冒頭で小野さつき訓導殉職の道徳教材化の難しさについて触れた。

道徳教材としての扱いには次のような難しさがある。

現在の道徳教育では、生命の尊重を重視するが、自分の生命と引き替えに他者の生命を尊重するということは、自分の生命を重視しないという問題に結びつくからである。その意味でモラルジレンマの事例となる。

戦前の修身においては、我が身を義性にして国家のために尽くすという例話が収録されているが現在の道徳では、それは扱いとして大変に難しいと言わざるを得ない。

しかし、校長大宮貞昭氏は前掲副読本の序文で「教え子を救おうとして自らの命を絶った訓導の道徳は、今でも語り継がれております。」と述べ、道徳としての扱いを強調している。意図的に自分の命を犠牲にして救おうとしたのではなく、訓導は教え子を救おうとして残念なことに結果的に亡くなったとい

うことが道徳教材化を可能にしているとも解釈できる。

小野訓導の殉職以後に起こった小学校教員の同様の殉職の例2つがどのように扱われているかを簡単に述べておきたい。とりあげるのは、東京都文京区立誠之小学校訓導と台湾二水尋常小学校訓導である。

この2つの例は、昭和期の事例である。前者は臨海学校での水泳指導中でのことであり、後者は水路におぼれた児童を救助しようとしたものである。

誠之小学校の市村錦吾訓導は⁽¹²⁾、1930（昭和5）年7月に、千葉県の大津海岸で行われた臨海学校で、5・6年の男子が潮に流されたことを発見し、他の先生方とともに救助に向かう。二児童は救われたものの、市村訓導は心臓麻痺で急死した。三人の青年により浜に抱え上げ、応急手当をしたが、森重博士、篠原医師、当時、来天中の赤羽被服本廠軍医等の手当を受けるが、殉職した。これにより、昭和2年より行われていた千葉県鴨川に学校独自の夏季臨海団（3週間）という行事は中止となった⁽¹³⁾。

この事跡は同校の周年記念誌でたびたび取り上げられ、校内に記念碑も作られた。今でも学校関係者によって追悼されている。しかし、教材化はされていない。

台湾旧台中州員林郷旧二水尋常小学校の浅井初子訓導の場合は、事跡が現在ウェブサイト⁽¹⁴⁾に掲げられているが、本稿のテーマに即した部分だけを抜萃する。

「二水尋常小学校訓導であった浅井初子先生は幼少の時に家族と渡台し、二水尋常小学校、台中高女補習科を修了し、1929年（昭和4年）4月から母校の教員となる。その後、熊本県出身の鉄道員、浅井安喜氏と結婚。1940年（昭和15年）8月15日の小学校の遠足の時、受け持ち児童が一人、用水路に落ちてしまいその子供を救うために着衣のまま飛び込み、ともに流れに呑み込まれてしまう。4児の母、享年31。」⁽¹⁵⁾「翌々日、台湾日日新報で「教児救おうとし、女教員も溺死、郊外遠足中に椿事」と報道され、3

年後の1943年（昭和18年）3月21日、学校関係者や二水地方有志が「殉職浅井先生之碑」を建立し除幕式が行われる。「建てられた当初は、この記念碑には「殉職浅井先生之碑」と刻まれていたという。」碑が作られた時、「浅井先生胸像」も作られ、石碑と向かい合うように置かれたという。

戦後台湾は日本統治を離れるが、二水公学校と二水尋常小学校の2校は統合され、二水国民小学となり、石碑等はそのまま受け継がれた。しかし、「浅井先生胸像」は撤去、石碑の文字も「精忠報国」、さらに「毋忘在莒」（忘れることなかれの意）と改められたという。1970年代の新校舎改築時、石碑は廃棄されず放置されたが、1998年（平成10年）の時、道徳教育に熱心な夏張啓校長が、元々の石碑に「師恩永垂」の言葉を碑として再建した⁽¹⁶⁾というものである。

現在、校庭の一角に「師恩永垂」と刻まれた25メートルの高さの記念碑があるという。

市村訓導の場合は追悼がなされているだけであるのに対して、現在の二水国民小学では道徳的側面が強調されている。

この両者は、大正期の小野訓導に続くべきことである。水難による殉職が繰り返され、教員のあり方について様々な影響があったと考えられるが、現在の日本で道徳教材として扱うには、難しさがある。しかし、台湾で扱われているように道徳教材として扱うというものの一つの考えであろう。

この小野訓導の教材化では、郷土を愛する心、郷土を知ることの事例として取り上げられている。郷土を愛する心として重要な事例である一方で、人命の尊重の扱いの難しさを、同校では郷土教材の副読本としてまとめたと考えられる。

筆者は以上のように考えてみたが、容易に整理できる問題ではないように思われる。筆者は現時点で、その困難さをほとんど解明できていないので、それを今後の課題として残し、研究ノートとして発表する次第である。

【資料1】（『河北新報』2016年3月31日掲載）
小野訓導の顕彰映画見つかる 7月上映へ



35ミリフィルムを調べる町教委の職員



小野さつき訓導

1922（大正11）年、白石川で溺れた教え子を助けようとして21歳で亡くなった刈田郡宮尋常高等小（現宮城県蔵王町 宮小）の小野さつき訓導を取り上げた映画のフィルムが北海道で発見された。町教委によると、小野訓導の映画は複数制作されたが、フィルムの現存が確認されたのは初めてという。

地元の小野さつき訓導遺徳顕彰会（会長・村上英人町長）が買い取り、専門業者の調査でデジタル化が可能と判明。町教委と費用を出し合い、命日の7月7日に宮小で行う第95回追悼式での上映を計画する。

映画のタイトルは「人生乃花 殉職訓導 噫々（あ）小野女教員」。

宮小によると札幌市の古美術商から昨年3月、解体する倉庫を片付けた際、35ミリフィルムが見つかったと連絡があった。町教委や顕彰会、同校PTAと協議し、翌4月に買い取った。

フィルムは白黒で、無声映画とみられる。全3巻のうち残っていたのは2巻で、時間は1巻当たり10分程度。全容は不明だが、町内でロケが行われたほ

か、勇気ある行動をたたえる賞状や遺品が収録されている。

この悲劇の反響は全国に広がり、松竹や日活が映画化し、22年に各地で上映された記録がある。町教委によると、今回のフィルムは両社のタイトルとは異なり、制作した会社や経緯は現時点で分からないという。

宮小の小関俊昭校長は「追悼式を90年以上続けてきたことが実を結んだという思いがする。地域の方々に見てもらい、命の大切さを後世に伝えたい」と話す。

[小野さつき訓導] 刈田郡福岡村（現白石市）出身。県女子師範学校を出て22年、宮尋常高等小に赴任。同年7月、4年生56人と近くの白石川で写生中、水遊びをした児童3人が溺れる事故が発生。はかま姿のまま川に飛び込み2人を助けたが残る1人と共に亡くなった。訓導は旧制小学校の教諭の呼び名。

引用・参考文献

- 宮城県教育会、宮城県刈田郡教育会編『殉職訓導小野さつき女史』実業之日本社、1922
- 東京都文京区立誠之小学校 誠之百周年記念事業委員会編『誠之百年』1975
- 宮城県刈田郡教育会編『刈田郡誌』臨川書店、1987
- 蔵王町史編さん委員会編『蔵王町史 通史編』1994
- 宮城県教育委員会編『宮城県教育史 第二巻 大正編』ぎょうせい、1977
- 両角千鶴子・玉置豊美・所澤潤・高橋浩・赤羽明・佐藤久恵「オーラルヒストリー群馬県の一女教師の歩み－昭和一桁の群馬県女子師範学校の体験を中心に－」『群馬大学教育実践研究』第23号、pp.327-362、2006
- 蔵王町立宮小学校『ふるさとを見つめて・わが宮』1991
- 佐々木吉三郎「職に殉げる小野訓導」『斯民』（中央報徳会）17(8)、pp.11-16、1922
- 岩田一正「殉職によって表象される教師の心性－1920年代初頭の教師文化の一面－」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第40巻、2000

注

- (1) 宮城県教育会、宮城県刈田郡教育会編『殉職訓導小

野さつき女史』実業之日本社、1922

- (2) 佐藤武『小野訓導の死と其前後』隆文館、1922
- (3) 林曼麗「大正期自由画教育運動における杉本茂晴の図画指導」『教育方法史研究第二集』東京大学教育学部、1984
- (4) 『児童中心主義の教育』というこの書籍は、遺徳顕彰館第3コーナーに展示されていた。
- (5) 同館展示の当日の教授日誌にも天気の記事がある。
- (6) 『河北新報』2016年4月15日（大庭昭一、邦子夫妻による提供）
- (7) 「東京朝日新聞（大正11年7月15日）」に記載されている。
- (8) 「大朝7月11日」とあり、大阪朝日新聞社の掲載と思われる。
- (10) 宮城県教育会、宮城県刈田郡教育会編、前掲注(1)

pp.119-120

http://www.kahoku.co.jp/tohokunews/201603/20160331_15001.html

- (11) 資料1参照
- (12) 東京都文京区立誠之小学校 誠之百周年記念事業委員会編『誠之百年』1975
- (13) 東京都文京区立誠之小学校 誠之百周年記念事業委員会編、前掲注(12) p.104
- (14) <http://www.mag2.com/m/0000094177.html>を参考

謝辞

東京未来大学こども心理学部教授所澤潤氏、准教授神部秀一氏、群馬大学総合情報メディアセンター中央図書館藤平政子氏に感謝申し上げます。

(さとう ひさえ)

【受理日 2016年10月26日】